

和泉式部歌集「勅字歌群」の考察

—表現の方法と基盤—

久保木 寿子

身「歌群と略す」

(集二六八～三二〇) 四十三首
(重三六七～三九一) 二十五首

一、問題の所在

和泉式部は、曾祢好忠を嚆矢とする初期定数歌⁽¹⁾がもたらしたある制約の下で詠む方法に基づき、多様な群作を試みている。好忠百首の系脈⁽²⁾に加わるべく定数を規制とする百首歌を試みたのみならず、好忠百首の後半に組み込まれていた音韻規制による勅字⁽³⁾「勅」は、くつわ。一首の頭(尾)の一字を制約する)群作の方法を援用し、三つの勅字歌群を編んでいる。

本稿では、和泉式部集(「集」と記す)・同統集(「統」と記す)所収の左記三つの勅字歌群を対象に、特殊な形態が産んだ和歌の表現の有り様とその表現基盤について考察する。三歌群は、詠歌内容からこの順に成立したものととして扱う⁽⁴⁾。なお(三)は一部重出する(「重」と記し、異文は本文中に小字で示す)。

(一)「いはほのなかにすまばかは」歌群(以下「いはほ」歌群と略す)
(集四三三～四四四) 十二首

(二)「我不愛身命」歌群(以下「不愛」歌群と略す)

(続四八九～五〇〇) 十二首

(三)「観身岸額離根草、論命江頭不繫舟」歌群(以下「観

これらの句は、それぞれ古今集・法華経偈文・漢詩句からの引用で、これらを各歌の冠音に置き歌群を連ねると同時に、歌群の統一的主题を規制するものとして提示する。その意味で、古今集序に「歌の父母」とする「あさかやま…」「なにはつに…」の二首を、歌内容とは関係なく単なる音韻規制として用いた先行百首の勅字とは異質で、本格的な主題を担う表現形態に推し進めた点において、和泉の三歌群の獨創性は際立っている。

勅字詠法では、詠い出しの最初の音(冠音)を契機に初句の一語が想起され、その語を機縁に以下の歌句が主題に即して引き出されていく。あるいは勅字題が主題規制として強く一首を意味的に制約するために、主題に適う冠音が後付けされる場合もあり得る。いずれにしても、予め景物が提示される屏風歌や特定歌材を承接する初期百首四季歌等よりも、景物への依存度は格段に低く、より正述心緒的な傾向性が強まることが予想されよう。

このような方法による和泉の勅字歌群への評価を、勅撰集との関係で見れば、和泉の歌が最大多数の六十七首を占める後拾遺集では、内二十首が百首歌からの撰入、他に挽歌群から三首で、勅字歌群からの撰入はない。これが千載集になると、「いはほ」歌群一首、「観身」歌群三首(他に百首歌一首、挽歌群二首)

と勅字歌群からの撰歌が見られ、さらに新古今集では、「観身」歌群五首（百首歌四首、五十首歌二首）、新勅撰集では、「観身」歌群一首（百首歌三首、五十首歌二首）となる。撰集資料の問題・撰集時期の先後のことなどもあるので一概には論じられないが、千載集以降になって、勅字歌群、就中「観身」歌群への関心が顕著になる様は見えてとれよう。

「観身」歌群歌を通じて藤原定家の和泉評価について論じた渡部泰明氏は、高評価の要因を「死」の主題性に見ていた。中世和歌が注目するような死の想念は、和泉の現実生活の変転を背景としつつ、(一) から (三) への経過のなかで深くその表現の形を得ていったと思われる。同じ勅字の方法によりながら、これら三歌群の間には詠作の背景の違いから生じたかなりの懸隔がある。本稿では、先ず歌群形成の動機を和泉の現実生活との関係に即して検証し、この懸隔の誘因について考えたい。

また、音韻・主題の二重規制の下での詠歌が、単なる実情の直叙ではありえないとすれば、膨大な歌ことばの蓄積の中から何が取捨され、一首はどう構成されたのか、先行歌との関係を検討することにより、言われるような「正述心緒」的效果を招いた詠法の解析を図りたい。仮説的に述べるならば、万葉集正述心緒歌の享受・影響というよりは、当代の貴族生活に浸透していた贈答歌の方法の摂取が大きいのではなからうか。

この時期、藤原撰関家を中心とした上層貴族の日常詠の集積である第二勅撰集後撰集の時代を経て、贈答歌は言わばお墨付

きを得て宮廷社会に蔓延し、宮廷女房たちの歌は、やがて私家集として編まれるほどに蓄積されてくる。藤原公任撰の三十六歌仙に撰入された古今集歌人の伊勢・小町に関わる諸本などが、それらの歌人の作らしい歌を加え増幅しながら編まれていったのもこの時期である。三条院女房小大君もまた三十六歌仙のひとりであった。これに続く中古三十六歌仙には、和泉式部を含む大量の女性歌人が名前を連ねることになる。その内、馬内侍・御形宣旨・赤染衛門等は、和泉の一世代前の歌人達である。このような女房歌人と男性貴族達とのしばしば恋愛に纏わる縦横な贈答歌の遣り取りを、和泉は、対詠性の強い「正述心緒」的な歌を詠じる一機縁として摂取しているものと思われる。

以下、歌群ごとに順次見ていく（テキスト・歌番号は、勅撰集は『新編国歌大観』（但し万葉歌は旧番号）、私家集は『新編私家集大成』による。私に表記を改めた）。

二、「いはほ」歌群の検討

最初に、(一)「いはほ」歌群（集四三三～四四四）の十二首（①～⑫で示す）について検討する。この歌群は、次のような詞書の下に展開する。

こころにもあらずあやしき事いできて、例すむ所もさ
りて嘆くを、親もいみじう嘆くと聞きて言ひやる、上

の文字は世の古ことなり (集四三三詞書)

ここに言う「あやしき事」とは、和泉式部集に散見する、

正月七日、親の勤事なりしほどに、若菜やるとて

こまごまにあふとは聞けどなきなをばいづらは今日も人の
摘みける (集二五二)

返し、親

なきなぞといふ人もなし君が身においのみつむと聞くぞ苦
しき (集二五二)

などが示す事態を指すであろう。和泉守橘道貞という夫がありながら「あやしきこと」が出来した結果、家を出ざるを得ず親からも勘当状態になった苦境の中で綴られたもの(長保年間か)で、親の元に「言ひや」った数首重ねの贈歌ということになる。最初の勅字歌群形成の具体的な契機を示すものとして注目される。「世の古こと」、即ち古今集雑下所収の「いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえ来ざらむ」の第二・三句を勅字としたのには、実体験に基づく相応の現実的な背景があったのである。十二首の連作には、深い後悔の念とともに、行き場のない苦境を訴え親の甘受を乞う心が象られる。

この歌群の特徴の一つは、現実の苦境の中から設題されたことともあって、個別の歌が第一次的な体験性を垣間見せることにある。例えば①⑩⑫のように、和泉式部集中の他の歌句との類似(傍線で示す)から、その詞書を参照することによって、詠作の背景を辿れるものがある。

①いにしへや物思ふ人をもどきけん報いばかりの心ちこそすれ (集四三三)

「イ」音に規定されて展開する冒頭歌。この「いにしへ」は、例えば『和泉式部集全釈正集篇』は「前世」の意にとっているが、次の歌からして過ぎ去った過去の意と見るべきであろう。

親など言ふことありければ、しのびてはらからどもな
ど、昔ありしやうにて物がたりする、あはれにおぼゆ
れば

いにしへのありしながらにある人も心がなしに物ぞ悲しき (集七四八)

これは、先述のような状況下で、密かに姉妹と会った折に詠まれたものと思いが、初二句「いにしへのありしながら」は、詞書の「昔ありしやうにて」に対応し、勘当以前の過去を指すものである。①もこれと同様、勘当以前の平穏な日常を「いにしへ」として回顧しているのである。

①の主旨は、好忠百首恋「あぢきなし身に増すものは何かあると恋ひせし人をもどきしかども」(好忠集四二五)に抛ろう。思い悩む者を「もどいた」過去の体験が、今、我が身の問題として反芻され、「報い」と認識される。「身に増すものは何かある」と自己の主体を疑わずにあったおごりの春への「現報」である。

因みに、「報い」は、抑も和歌には馴染みの薄い仏語だが、古今集「誹諧歌」に二首見られる。「われを思ふ人をおもはぬ報い

にやわが思ふ人の我を思はぬ」（雑体一〇四二）のように、思うに任せない人の心を、因果応報の觀念に結びつけた自虐的な口吻が、誹諧の要素になるのであろう。このような語を、和泉は歌集中の数カ所で用いている。その中の次の一首は、これも詞書からして、七四八と同一の状況での作とみられるが、より生な体験を反映している。

親はらからなど、同じ所にはかにほかほかになりて後、
尊ときことするに言ひやる

その中にありしにもあらずなれる身を知らばや何の罪の報
いと

（集七一七）

法事のある親姉妹に、同席できない嘆きを訴え、「知らばや何の罪の報いと」と疑問を發する。

①はあたかも、これに対し自答するかのように、かつての行為の「報い」なのだとしてこれを納得しようとする。言わば七二七歌に対する答歌の体なのである。

ここに見られるのは、一次的・体験的な日常詠を基盤に、自らの感情にある種の反芻整理を加える和泉の手法である。体験的・実情的な自詠を反芻し問い返す中から、自問自答的に和泉の歌は展開していく。自詠への応答的行為として、一次的な場を持つていた対詠（会話）性が取り込まれることになる。

⑩花咲かぬ谷のそこにも住まなくに深くも物を思はるるかな

（集四四二）

「ハ」音に始まる一首。この歌にも、①歌と同様、第一次的な

詠歌事情を窺わせる歌が見られる。

もののおはれにおぼゆれば、ものへなむ詣つると聞き
て、いづくへぞ、其所へなんとだに言へと、人の言ひ
たるに

いかばかり心深くもあらぬ身も憂（い）ければ谷のそこへ
こそゆけ

（集一五一・重七一六）

この歌は集七一六に次の詞書で重出し、前掲の七一七に連接する。

物へ詣つと聞きて、もし其所へかと言ひたるに、さな
れば

（集七一六詞書）

どちらにしても、「いづくへぞ、其所へなんとだに言へ」「もし其所へか」と、行き先を尋ねられて返した事情が説明される。問われた「其所」に掛けて「(谷の)底」と行き先を示し、「(心)ふかく」は「(谷の)底」の縁語となる。

このように、もとはと言えは「其所」（居場所）が問題だったものが、⑩では、第一次的な場での人との受け答えを欠き独詠的に纏めあげられた結果、掛詞が機能せず、「其所」の意味は失われる。が、一五一歌の「心深くあらぬ身」（しかし）——（深い）谷の底へ行く」という上下句の意味合いが、⑩では「（深い）谷の底に住まぬ」（しかし）——深く物思う」と反転され、今の物思いの深さに収斂させて終わる。ここにも、音韻規制を契機に、自らの歌を反芻し（ここでは否定的に媒介させて）、主情を打ち出していく和泉の方法を見ることができるとであろう。

⑦に「ごり江のそこにすむとも聞こえずはさすがに我を君恋ひじやは」
(集四三九)

この「そこにすむ」も同種の趣向による。これは掛詞としての両義(底―澄む・其処―住む)を保持している。

⑫春雨の降るにつけてぞ世間のうきもあはれと思ひ知らるる
(集四四四)

歌群最後のこの歌にも、詠歌事情を推測させる歌がある。

また、人に

詠むれば思ひ知らるる世間のうきもあはれも知る人ぞ知る
(集七五〇)

語順に変動があるものの、ほぼ同一の表現をとる。この七五〇歌も一連の背景の下に一括しうる歌である。この「詠む」が「長雨」の連想を呼び、冠音「ハ」から「春雨」が導かれたのであろうか。しかし、後者が贈歌として、「人に」向けて「うきもあはれも知る」ことを求めるのに対し、⑫にはそれがなく、独り「思ひ知らるる」のみである。独詠的に閉じているのである。

以上見てきたように、①⑩⑫の表現が生じた背景には、集七一五〜七一一七、七四八〜七五〇のような日常詠があったと想定される。繰り返すが、このような現実生活でのさまざまな人間関係の中で交わされた歌の言葉が本歌群の数首に取り込まれ、言わば再構成されていることに注目したい。ここに見られるのは、体験的・一回的な日常詠を基盤に、自らの感情にある種の反芻整理を加える和泉の手法である。実情的に詠まれた自詠を

反芻し問い返す中から、自問自答的に和泉の歌は展開していく。喩的景物に依拠する余地もないような、正述心緒的表現と見せながら、実は過去の自詠への応答的行為として、一次的な場が持っていた対話性を回復する手法である。冠音の規制は、そのための契機であったと思われる。和泉式部の和歌について言われる実情性・正述心緒性は、このような体験的自詠との対峙・応答・再構成という経緯を経て、独自の心情表現として獲得されたのではなからうか。

なお、前記の詠歌事情に因ろうが、この歌群には親子相互の関係を捉える、②「玉となしけん」、⑤「おのがふねふね」、⑪「たらちねのをしみもしけん」のような表現が見られるが、一方、後半に掛けての次の三首には、「君」という対称表現が続けて現れる。

⑥悲しきはこの世ひとつが憂きよりも君さへ物を思ふなりけり
(集四三八)

⑦に「ごり江のそこにすむとも聞こえずはさすがにわれを君こひじやは」
(集四三九)

⑧過ぎにける方ぞ悲しき君を見てあかしくらしを月日と思へば
(集四四〇)

この対称は実情性を強く喚起する語であるが、詠歌の実際は以下に見るようにやはり構成的なものである。

⑥の初句「悲しきは」は、命題的にある観念を呼び起こす(挽歌群(続七三)・五十首歌(続一三七)参照)。初出例は好忠百

首（つらね歌）「悲しきはからにもあらぬ山辺に埋れてゆかぬ谷がはの水」（好忠集四八〇）である。⑦の錯綜する視線の有り様は、前述の自問自答的な態度に因る。⑧では、「君」と共に実在的に動いていた過去の「時」を、失った今、悲しむ体のもの。この歌群も、他の二歌群と同様、基本的に独詠的に詠まれているのだが、和泉はこれを親の元へ「言いひや」っている。切迫した内心の思いを訴える有効な手段としてしているのである。和泉式部日記の数首重ねの贈歌や手習文が想起されるところでもある。

三、「我不愛身命」歌群の検討

次に、「我不愛身命」歌群（統四八九〜五〇〇）十二首（①〜⑫で示す）について検討したい。

その主題性の有り様と成立時期については、注（4）拙稿にて論じたが、『法華経』勸持品の偈「我不愛身命 但惜無上道」を主旨とし、ひたすらな仏道への帰依を詠うはずのものである。この偈を勸字題とした背景には、第二次勸学会の影響があらう。長保四年（1002）六月の為尊親王薨去後になるが、『権記』同年八月十八日の条には、「詣左府、有二十八品和歌、大弼作序、入夜罷出」の記事が見られ、これは『本朝文粹』卷十一所収の藤原有国「讚法華経二十八品和歌序」により確認される。道長主催の「東三条院詮子追善法華八講」の折のことで、公任・斉信・

俊賢・行成らの参会が確認される。以降、法華三十講時の歌合の催行が恒例化していく。すでに漢詩では、正暦六年（995）「備後介題法華経八品詩本韻」のことがあり、行成・公任・為憲の参会が指摘⁷されている。また杉田まゆ⁸子氏は、公任集・赤染衛門集が法華経二十八品和歌に加え維摩経十喻和歌を含むことから、長保五年（1003）十月、道長主催の興福寺維摩会の影響を指摘し、和泉の歌数首についても維摩経十喻からの影響を見、公任詠からの影響を推測している。

一方、その直前の同年九月二十八日、花山院には「院源僧都説止観」（『権記』同日条）のことがあった。

このように仏教への傾斜を深める社会的状況の中で、和泉が経文に注目したのは当然かもしれない。が、単なる経旨歌の域を超えて、敢えて勸字題による群作を為したことは、やはり個人的な事情を斟酌するべきであろう。（二）と同様に現実生活に根ざした詠歌行為だとすれば、ここに長保五年十二月、東三条院南院入りを契機に帥宮敦道親王（冷泉帝第四皇子）の文化圏に接したことの影響を見ても牽強ではあるまい。

帥宮自身の宗教的な事跡は、正暦四年（993）三月十五日、木幡に参詣（『小右記』同日条）、同五年（994）二月二十日、関白藤原道隆の積善寺供養会に参列（『日本紀略』同日条）、寛弘二年（1005）九月二十六日、法事のこと（『権記』同日条）等があるが、和泉式部日記にも見るように宮の仏道帰依への思いは深い。

和泉式部集に「帥の宮にて題十給はせたる」とする、「大井川

の筏」以下「清滝川の月」までの十題詠（和泉集三五四～三六三）がある（一部欠落）。寛弘元年から寛弘三年の秋の間のことであろう。『全釈』はこの設題に「河陽十詠」（『文華秀麗集』下）の影響を見る（山寺鐘など）が如何。延喜七年亭子院の大堰川行幸和歌題を想起させるもの（紅葉・岸に残る菊）もある。花山院に年次不明ながら大堰川行幸和歌題詠があり、また権力拡大を図る藤原道長の大堰遊覧が頻繁になったのに伴い貴族達の大堰詠も増えるが、この歌群はそれらの行幸讃仰や遊覧の気分とは無縁で、総じて陰鬱な調子で一貫している。森田兼吉⁹氏の指摘のように、これは提題者である帥宮とその周辺の気分を色濃く反映した結果と見られる。

この十題詠の表現には、拾遺集歌と類似・類想のものがある。例えば、

*おほる河くだすいかだの水なれ棹さしいづる物は涙なりけり
（集三五四）

大井河くだすいかだの水なれ棹見なれぬ人も恋しかりけり

（拾遺恋一・六三九／拾遺抄（以下「抄」）ナシ）

これは同一の序を借り拾遺恋歌を、「涙」へと暗転させたもの。
*夕暮は物ぞ悲しき鐘の音をあすも聞くべき身とし知らねば

（集三五五）

山寺の入あひの鐘の声ごとにつも暮れぬと聞くぞ悲しき

（拾遺哀傷一三三九／抄雑下）

希な歌材である「鐘」が和泉詠に多いのは、拾遺集歌の影響か。

因みに拾遺歌は、御形宣旨集一八（増補部分カ）に、初句「オホソラノ」として入る。

*紅葉ばの散るもをしまじ亀山の劫を尽くして成りもこそすれ
（集三五九）

女院御八講捧物にかねして亀のかたをつくりてよみ侍
りける 齋院

劫尽くす御手洗河の亀なれば法の浮き木に遭はぬなりけり
（拾遺哀傷一三三七／抄ナシ）

「女院」は詮子。齋院は選子内親王。その発心和歌集（以下、発心。寛弘九年成立。）には「常不輕菩薩品」の「億億万劫、至不可議、時乃得聞、是法華経」を題とする次の歌がある。

いかにして多くの劫を尽くしけむかつ聴て（く）カ）だに
もあかぬみのりを
（発心四四）

他に「尽於未来一切劫」の経句なども、発心和歌集七（後掲）や十四歌の題に挙がる。

和泉の勅撰集初出歌、『法華経』化城喻品「從冥入於冥、永不聞仏名」に拠る「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」（拾遺哀傷一三四二／抄ナシ）は、まさにこの花山院撰とされる拾遺集哀傷の部に入集した一首で、「雅致女式部」とあることから若年の詠とされるが、拾遺集の成立を寛弘二・三年末頃までと見れば、和泉の南院生活中に性空との結縁の機会を得て浮上した可能性もあろうか。小大君の大江為基への贈歌「長き夜の闇にまよへる我をおきて雲がくれぬる夜半の月か

な」(小大君集二二)の影響を見ておきたい。

では、同じく『法華経』観持品から「我不愛身命」の偈を引き勅字題とした当歌群の、経文との関わりはどのようなものであろうか。

(4) いかばかり深き海とかなりぬらん塵の罪だに山と積もれば

(統四九二)

『和泉式部家集考証』(岸本由豆流版下本) 頭注は、『智度論』第九十四から「積微塵成山、難可得移動云々」を、岩瀬法雲氏は「破煩惱山、竭愛欲海」(四十華嚴経)を引き、『全釈』は、罪深さを言うために『法華経』普門品の「弘誓深如海」を「逆に取りなした」ものとする。

発心和歌集、普賢十願「称讚如来」の歌には次の表現がある。

各以一切音声海、普於無量妙言詞、尽於未来一切劫、

讚仏深心功德海

思ふにもいふにもあまる深さにてことも心も及ばれぬかな

(発心七)

素直な帰依の深さである。逆に罪障感の深さの比喩とする和泉の屈折が際立つてであろう。

(7) 惜しまれぬかたこそ有りけれいたづらに消えなむ事は猶ぞ悲

しき

(統四九五)

「我不愛身命 但惜無上道」に依るはずが、これも「逆に取りなし」で、現世への執着を詠う。これが相対化されるのは、後述「観身」歌群²⁶の歌によって、「惜しとおもふ折やありけむ」

と、この事が回顧される時である。

(8) はかもなき露をばさらにいひおきてあるにもあらぬ身をいか
にせん

(統四九六)

初句「はかもなき(露)」は、「いはほ」歌群²「はかもなき露のほども消ちてまし玉となしけんかひもなき身を」(四三四)と同一の出だしたが、体験性は消え、消えずにあるのに「ある」とも言えないような「身」を、露の縁語「あり」ということばで観念的に押さえたもので、これは後の「観身」歌群「見る程は夢もたのまるはかなきはあをあるとてすぐすなりけり」(二六八)へと連なる。詠歌の背景の変質に伴う三歌群の歌の変容が辿れる具体例になるが、これについては後述する。

これらと類同の歌句を持つ歌が発心和歌集に見られる。

はかなくもたのみけるかなはじめよりあるにもあらぬ世に

こそ有りけれ

(発心二一)

これは、『仁王経』下巻「有本自無、因縁成諸、盛者必衰、実者必虚」を題とした釈教歌である。あるいは和泉の次の歌(11)の方が、「世」への眼差しにおいて、さらにこれに近いであろうか。

(11) 幻にたとへば世はたのまれぬなけれどあればあれどなけれ
ば

(統四九九)

歌頭に「幻」を置くが、これは『維摩経』十喻に「是身如幻」として挙げられる「聚沫・泡・炎・芭蕉・幻・夢・影・響・浮雲・電」の中の「是身如幻、從転倒起」によるもので、まさに「転倒」を歌う。発心和歌集「かげろふの有るかなきかの世の中

にわれあるものとたれ頼みけん」(四二)は、「世皆不牢固、如水沫泡焰、汝等咸应当、疾生厭離心」(『法華經』隨喜功德品)を題とするもの。『全釈』は、古今雑下の「世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありて無ければ」を挙げる。さまざまな形で無常の意識が浸透し、和泉もその埒塙の只中に居たのである。

種々の経文は虚の思想・無常觀を象するための譬喩の宝庫であった。和泉が男との関係の危うさを皮肉った「白露も夢もこの世も幻もたとへていへば久しかりけり」(後拾遺恋四・八三二)などからは、これらの比喩が生活に溶け込み日常化している様が窺われよう。このような仏教的觀念を支えるのは「死」の現前であり、そこから三世に渡る時間と救済の問題が意識されてくる。

(10)しばしふる世だにかばかり住みうきに哀いかでかあらんとす
らむ (続四九八)

来世での時間の内にある自己を詠う。億万劫を視野に入れての不安である。先述のように発心和歌集は、「常不輕菩薩品」の「億億万劫、至不可議、時乃得聞、是法花經」を題に、億万劫を経ての法華經との出会いを詠うが、和泉詠は、来る世の永劫の時間の前に立ち竦む。

(12)過ぎゆくを月日とのみも思ふかな今日ともおのが身をば知らずて (続五〇〇)

当歌群の最後の一首。無常迅速な時間の内にある自己の、存在

認識の不明さそのものを扱う。『全釈』は、栄華物語(見果てぬ夢)から、小大君の為頼への返歌、「あるはなくなきは数そふ世の中にあはれいつまであらむとすらむ」(為頼集二五)を挙げる。止まることなく経過する時間への認識を取り出す上句において、和泉の歌の独自性は際立つ。

以上、経文を強く意識しこれを受け止め渡り合いながら、世尊・衆生のいずれの視点に付くこともなく、むしろ「但惜無上道」に収束され切れない生身の実存が問題とされた。このような特異な経文題の設定、教義に背きかねない実存性の表出を支えたのは、大堰十詠の提題者であった帥宮の存在ではなかったか。独詠歌群の形を取りながら、題意に即し、宮に共鳴するべく無常の世を嘆きつつ、他方、正直に現世への執着を訴える矛盾の中に、この歌群の対詠性を捉えておきたい。

四、「觀身岸額離根草、論命江頭不繫舟」歌群の検討

この歌群は、和泉式部集二六八〜三一〇の四十三首(1)〜(43)で示す。内二十五首が重出する(重三六七〜三九一で示す)。「觀身岸額離根草、論命江頭不繫舟」の漢詩句を軸字題とする。これは、『和漢朗詠集』「無常」に羅維(巖維カ)作として収録されるが、朗詠集の成立は寛仁の頃まで下り、当歌群成立の後になる。永観二年(984)、花山院の同母姉尊子内親王(円融妃)の為に、源為憲が編んだ『三宝絵詞』上巻冒頭序に引かれるのが早

い例で、和歌では小馬命婦集の巻頭歌（東山逍遙歌一〇首の中）「たとへつつ岸のほとりに身を捨ててつながらぬ船ものどけかりけり」（小馬命婦集二）がこれを踏むのが初見か。⁽¹²⁾ただしこの歌は上下句にこの詩聯を踏みながらも、「無能無所求、飽食而遊遊、汎若不繫舟、虚而遊遊者也」（『莊子』列禦冠）に繋ぐことで、「無心無碍の平穩」な「のどけき舟」を詠う。『匡衡集』にも同趣の引用が見られる。

漢詩句題ながら「観身」「論命」が端的に示すように、この歌群の表現と先行歌との関連を見ると、「不愛」歌群と同様、仏教の教義と実存の問題に絡む歌が浮上してくる。中でも拾遺集哀傷の部との関連が強く迫り出してくるのは注意される。また男女の贈答歌からの多岐にわたる表現の摂取が、対詠性を支える基盤としてあるようだ。以下、順次見ていく。

【仏典との関連】

先ずこの歌群の仏典との関連については、三角洋一氏⁽¹⁴⁾に詳細な指摘がある。それに依拠しながら初期定数歌との関連も併せて見ておく。

①みる程は夢もたのまるはかなきはあるをあるとて過ぐすなりけり
(集二六八)

②はかもなき露のほどにも消ちてまし玉となしけんかひもなき身を
(集四三四)

(8)はかもなき露をばさらにいひおきてあるにもあらぬ身を
いかにせん
(続四九六)

(11)幻にたとへば世はたたのまれぬなけれどあればあれどな
ければ
(続四九九)

「露」「幻」から「夢」へと、先行歌群からの展開である。既述のように背景には『法華経』随喜功德品「世皆不牢固、如水沫泡焰…」や『仁王経』下巻「有本自無、因縁成諸…」、『維摩経』十喻の「聚沫・泡・炎・芭蕉・幻・夢・影・響・浮雲・電」などの観念がある。が、当歌は初二句において、儂さを知りつつ夢を頼みにしてしまう儘ならなさを「たのまる」に凝縮させ、下句では、そのようにしてこの世に「ある」こと自体の儂さと、無効性の中で「過ぐす」ことの空虚を突く。敦道親王喪失の体験を通じて得た確信であろう。観念に留まらない実感・体験性を「なりけり」が断定的に示す。虚妄と知りつつ生き続ける不条理感の詠出である。

③観ずれば昔の罪をしるからになほ目の前に袖はぬれけり
(集二七〇)

初句は仏語。観想を示す。単独例。勅字故のことである。この歌について三角氏は、『諸経要集』巻十四・十悪部から「経日、欲知過去因、当看現在果、欲知未来果、但看现在因」を引き、このような「ある経の文句をふまえたもの」として、「過去の因つたなく、現在の悲嘆を招いたと身の上を観察したところ」で、やはり涙がこぼれる」とその意をとらえている。「目の前に」の用例は、古今集以下の恋歌に散見するが、和泉では、帥宮挽歌群に「御忌日に」の詞書のもと次の用例を見る（他に二

例―集六〇七・統三八四)。宮一周忌の頃の詠。

目の前に涙にくちし衣ではこそこの今日まであらむとや見し

(統八八)

宮の死を眼前にしたその体験を前世の罪の結果と観じながらも、袖は「涙に濡れた」のであった、と生の体験性を打ち出す。仏教的観念に随順しきれない生身の情感を示そうとするものである。

〔20〕瑠璃の地と人も見つべしわが床は(宿に)涙の玉と(の)しきにしければ

(集二八七・重三七二)

初句「瑠璃の地」は、三角氏によれば『葉師瑠璃光如来本願功德経』の「瑠璃為地、金繩界道」を「思い浮かべたもの」という。ラ行の音をもつ和語は限られるため、和泉に限らず勅字歌群には、しばしば仏語・漢語が取り込まれるが、ここも先行する初期定数歌人の歌、

瑠璃草の葉におく露の玉をさへ物思ふときは涙とぞなる

(順集三九「あめつちの歌」)

瑠璃の壺ささらるさきは蓮葉にたまれる露にさも似たるかな

(好忠集五四五(順百首))

の影響があろう。和泉の歌は単なる比喩を超え「瑠璃の地」即ち浄土そのものを、涙にくれる現実にそぐわない幻視として提示する。

〔41〕類よりもひとり離れて知る人もなく越えん死出の山道

(集三〇八)

同じくラ行音の漢語「類」に始まる。好忠百首(「あさかやま」)の次の歌を踏む。

類よりもひとり離れてとぶ雁のともに遅るるわが身かなし

(好忠集四三二)

死出の路を独り辿る我が身の仮想。三角氏は三句以下につき、『摩訶止観』卷七上の「無常殺鬼、不摂豪賢……所有産貸、徒為他有、冥冥独逝、誰訪是非」(『往生要集』大文一にも)によるとする。後拾遺集哀傷五三七、栄華物語(鳥辺野)に定子皇后宮の臨終詠として載る「知る人もなき別れ路に今はとて心細くも急ぎたつかな」も同様の典拠に依ろう。長保二年(1001)十二月のこと故、和泉歌に先行する。

以上、「観身」歌群を仏典との関わりから見てきたが、「不愛」歌群が、教義との問答の趣を呈し総じて観念的だったのに対し、この歌群は宮との死別を経た後の詠歌故か、他者の非在への嘆き、自己の死への想到など、実情性が増したものとなっている。世尊・衆生の視座から詠まれることもなく経旨歌などとは全く遠い。

【拾遺集との関連】

次に、拾遺集所収歌との表現上の類似を問題としたい。すでに大堰十詠に兆していた傾向性の確認である。

〔19〕たらちめの諫めしものをつれづれと眺むるをだにとふ人もなし(き)

(集二八六・重三七二)

右の歌の初二句は、拾遺集恋歌所収の

たらちねの親の諫めしうたたねは物思ふ時のわざにぞ有り
ける
(拾遺恋四・八九七／抄恋下三三三)

に依るものであろう。諫められる行為は「つれづれの眺め」である。かつて咎められた物思う窮状を、今は誰も問わない。他者の不在と取り残された孤独が詠われる。恋歌から挽歌への変換があるのか。高遠集の長歌にも「たらちねの親の諫めしこと
はなを：」の例がある。

〔23〕命だにあらば見るべき身のはてをしのばん人もなきぞ悲しき
(続一三四・集二九〇)

「自分の最後を見とり偲んでくれるような人もいない」と、これも他者の非在を詠う。初句「命だにあらば」の用例は深養父・実方などにも散見するが、拾遺集の恋歌に次の一首がある。

いかにしてしばし忘れん命だにあらばあふよのありもこそ
すれ
(拾遺恋一・六四六／抄ナシ)

が、問題は、和泉歌の三句以下の「我が身の果て」を扱う奇矯とも言える設定である。ここにもう一首、拾遺集哀傷所収の歌を介在させて考えたい。

忠蓮、南山の房の絵に、死人を法師の見侍りて泣きた
る形かきたるを見て
源相方朝臣

契あれば屍なれどもあひぬるを我をば誰かとはんとすらん
(拾遺哀傷一三三八・抄五七〇)

和泉〔23〕歌は、拾遺集の状況設定―絵の形に基づく―に依拠して構想されているのではなからうか。恋歌の「命だにあらば」逢

えるかも知れないという期待は、哀傷歌では屍となった相手との再会に変わる。それも因縁あつての故。さらに哀傷歌は、下句で自らの死を看取り悲しむ他者を求める。絵の中の「死者」とそれを「見」て泣く「法師」、さらにその絵を「見て」、我が屍とそれを訪う他者の不在を詠じる「相方」。この錯綜する視線は、絵を介在させることなしに、和泉の〔2〕に撰取されたのではなからうか。この歌群の最終歌〔43〕「寝し床に玉なき骸をとめたらばなげのあはれと人も見よかし」(集三九二)も、これと同一趣向の歌である。「忠蓮」は天台僧、「南山房」は叡山のそれかとされる。相方は、六条左大臣源重信の男、致方の弟。正暦五年(994)に東宮(居貞)傳を兼任するが、翌年五月には薨去。

〔31〕えこそなほうき世と思へどそむかれぬおのが心のうしろめた
さに
(集二九八・重三八一)

出家へと動く心と、それに順い得ない生身の心の迷いを詠う。拾遺集哀傷には、慶滋保胤の出家時の一首が入る。

うき世をばそむかばけふもそむきなんあすもありとは頼む
べき身か
(拾遺哀傷一三三三〇)

あたかもこれに返すかのように、和泉は踏み切れない自らの「心」を慨嘆する。同趣の詠に、

山里にいりぬる月も何なれやわれはうき世のそむかれぬか
な
(重之子僧集二〇〇)

そむけどもそむかれぬはた身なりけり心のほかにうき世な
ければ
(能因集七四)

などがある。「身」「心」の乖離を正面から扱う能因詠は、出家の身をうらやむ輔尹への返歌。

[37] 露をみて草葉の上とおもひしは時まつ程の命なりけり

(三〇四)

三角氏は、『金剛般若波羅蜜經』末尾の偈「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是觀」(第八卷)に加えて、「秋風になびく草葉の露よりも消えにし人を何にたとへん」(拾遺集哀傷二二八六／抄五五三)を挙げるが、むしろ、

病して人多くなくなりし年、なき人を野ら藪などにおきて侍るを見て
佐清

みな人の命を露にたとふるは草むらごとごに置けばなりけり
(拾遺集哀傷二二三五／抄ナシ)

この方が、「命」を「露」と同定する点において近いであろうか。事実によるとは言えこれも奇矯な題材ではある。和泉はこれを「命」そのものの歌として詠み変えたものか。

[39] 限りあればいとふままにも消えぬ身を(の)いざ大方は思ひ

捨ててん

(集三〇六・重三八八)

これと初句を同じくする歌に、拾遺集哀傷所収の道信の歌がある。

限あればけふぬぎ捨てつ藤衣果てなき物は涙なりけり

(拾遺集哀傷二二九三／抄雑下五五八)

これは小大君集四六には、下句「涙の果てぞ知られざりける」の形で入る。一見当歌とは相異なる趣向歌なのだが、これを帥

宮挽歌群の「限りあれば藤の衣はぬぎ捨てて涙の色を染めてこそ着れ」(続八五)に照らすとき、やはり両者の関係性は見ておくべきであろう。

初句ではないが、発想は好忠の次の歌に近い。

ありへじと嘆くものから限りあれば涙にうきて世をもふる
かな
(好忠集四二〇)

また、二・三句が、和泉の五十首歌の次の初二句に類似する。当歌群との影響関係を見たい。

いとへども消えぬ身ぞうきうらやまし風の前なるよひのと
もしび
(続一三四)

以上、死に関わる特異な表現に於いて、拾遺集哀傷歌との表現の類似性が極めて強いことが確認されたかと思う。「拾遺抄」にはなかった「哀傷」の部を新規に立てた拾遺集の意図に、和泉は強く共鳴していたものと思われる。帥宮挽歌群・五十首歌との関係が窺われることからしても、寛弘四年十月の帥宮薨去がその契機であったかと推測される。

【贈答歌との関連】

帥宮薨去後に、和泉は初めて独詠の時を迎えたのかもしれない。が、「他者の非在」を詠うことは、対詠性を失ったということではない。以下では、私家集に見られる贈答歌との関わりからその対詠性のあり方を見ていく。

[10] ひねもすに嘆かじとだに有るものを夜はまどろむ夢も見てし
か
(集二七七)

これは、終日と夜の対比において、和泉五十首歌への回路を開いたかとも推測される歌であるが、先ずは先行する「いはほ」歌群の次の歌との関係を見るべきであろう。

⑨まどろまばうき世夢とも見るべきにいづらはさらに寝られざりけり
(集四四一)

「まどろみえない」苦境を強調する⑨歌は、為頼集の次の贈答歌に依拠しているよう。

また、宣耀殿の民部の乳母のもとより、おなじころ

君はいかに寢覚めつらめや思ひやるわれだによをば思ひあかすを
(為頼集七二)

かへし

寢覚めとはまどろむほどのあらばこそうき世を夢と見るばかりなり
(為頼集七三)

「寢覚め」は、男女が交わす贈答歌の世界では、想いが深ければ眠ることも「寢覚め」ることもないはず、としばしば非難の対象となる。ここでも攻める七二に対し、七三は「まどろみもしない」と抗弁する。⑨は、あたかも七三を受け、更に切り返すかのように、「せめて夜は歎かずまどろみたいのだが」と苦境を強調する。⑩の歌も、苦境から逃れて「まどろみたい」思いを主題とする。これとはややずれるが、先行する拾遺集哀傷の中務の一首も挙げておこう。

むすめにおくれ侍りて

中務

忘れられてしまどろむ程もがないつかは君を夢ならで見

ん

(拾遺哀傷一三二・抄恋下三七三)

この歌は、中務集Ⅱ二八三には「ため本しぼちのもとへ、十二首」の中の一首として入る。和泉五十首歌(夜中の寢覚)「恋ひて泣くねにだに寢ばや夢ならでいつかは君を又は見るべき」(続一四二)の下旬が、この中務詠に拠ることに留意しておきたい。

⑫人とはばいかに答へん心から物おもふ程になれる姿を

(集二七九)

この歌は、寄物による比喩表現をとらず、悩める自己の姿を直に慨嘆する、その意味では正述心緒詠とも言うべき一首である。窮状は倒置の形で下旬に詠まれ、上句では、このような言わば異常な我が身への他者からの問いかけを想定し、答えに窮する自身を想定する。自問自答の歌である。

この初二句と同様の表現が、馬内侍集・高遠集にも見られる。先ず、馬内侍集では、

忍びたる人、遠くはいかが思ふ、限りなめりかしと言ひたれば

(馬内侍集一三四)

人とはばいかが答へむ涙だに心してやは袖をぬらさぬとあり、涙にくれる詠を誰かに問われたとしても、忍びの恋故に説明できないと嘆くもので、別れを切り出した男への対詠歌である。一方、高遠集では、次のような御形宣旨との贈答歌に同様の初二句が見られる。

御形といひし人は、世にゆへありて聞こえし人なれば、東宮の宣旨になりてさぶらひしほどに、ものなど言ひわたりて、さるべき暇のありしに入りて臥したりしに、言ふかひなしとや思ひけむ、いと懐かしくありて、今宵はすぐせざるやうありと言ひしかば、何かはと思ひて、夜もあかさで出でて、またの日かくなむ

人とはばいかに答へむはかなくていさとばかりのいらへをやせむ
(高遠集九三)

返

なき名をばとふ人もあらじ忘れなでいかに答へむと思ひけるかな
(高遠集九四)

男は、不首尾に終わった一夜のことを恨み、説明がつかないと訴えるが、女は、説明しようとすること自体の無意味さを衝き、「とふ人もあらじ」と切り返す。典型的な男女の贈答歌である。このような「人とはば」と仮定する歌は、[\[12\]](#)歌に限らず和泉式部集・続集の贈答歌中にも散見される。詠歌事情に関わると思われる前後の歌と共に掲げると、

今はたえてあはじなど言ひてのちも、またいきあひてしのおれど忍びあまりぬいまはただかかりけりてふ名をぞ立つべし
(続三八八)

同じやうなる人に

a 人とはば何によりとか答へましあやしきまでも濡るる袖哉
(続三八九)

忍びたる人きて、雨のいみじう降るに帰りて、濡れたるよしなど言ひたるに

b かくばかりしのふる雨を人とはばなにに濡れたる袖と言ふらん
(続二五四)

(思ひがけずはかりて、もの言ひたる人に)

c 人とはばいかが答へんおほかたは君も忘れね我もなげかじ
(続二七四)

a の詞書「同じやうなる人」とは、前歌(続三八八)からして「しのぶる」関係にある男なのであろう。b もまた思うに任せない忍ぶ関係で、溢れる涙の言い訳が出来ないことを嘆くもの。馬内侍一三四歌と趣向が似る。一方c は、説明しがたい男との関係そのものに帰因する困惑を詠むもので、高遠集の例に近い。和泉の先行歌享受の様態は、先ずはこのような和泉自身が男と交わした贈答歌の中に見て取れる。これらはすべて、男との関係に疑念を抱くはずの第三者を想定し、説明のつかなさを通じて、自らの苦渋を男に訴えかける歌である。つまり、独詠歌ながら、贈答歌として交わされる相互の応答の上に成り立っているもので、その意味では馬内侍集・高遠集と同様の対詠性を基調としている。

では、再び「観身」歌群[\[12\]](#)の一首はどうであるうか。同じく「人とはばいかに答へん」と、疑念を持ち問いかけてくるはずの第三者を想定しながらも、この疑問への解答は、他の誰にも求められることなく、自問の形で自身に回帰するしかないが、「心

から物おもふ程になれる姿」を、われと説明が付かないのである。本来ならばそれを訴えかけるべき相手（男）が、ここには居ない。当群作は、独詠歌の連なりであり、贈答歌の形態が許されないところから、本来「人とはばいかにこたへん」と相手（男）に訴えかけるはずの疑問が当て処を失い、その対詠のベクトルは自身に厳しく跳ね返ってくる。自己凝視の形、孤絶の姿が浮上してくる過程をここに見ることができるのではなからうか。

〔33〕ほどふれば人は忘れてやみにけむ契りし事を猶たのむかな

（集三〇〇・重三八三「やみぬらん」）

これと類似の初二句が、同じく馬内侍集二五に見いだされる。

左大殿（将力）帰りたまひて、雨ふるにいはるとときき

給ひて

つかのまも恋ひしき人はつれづれとながめに物やおもひま

すらん

（馬内侍集二四）

ひさしくありて、おほしいでて

ほどふれば忘れやしにし春雨のふることのみぞわれは恋し

き

（馬内侍集二五）

返し

いとどしく濡れのみまさる衣手に雨ふることをなにかく

らん

（馬内侍集二六）

この二五歌は、風雅集恋二には「左近大将朝光」として入る。

「古る事」を巡り、例によって「お忘れか」と恨みの体で女に問

い、女は「ふ（古・降）る事ゆえに袖は涙の雨に濡れている」と切り返す。

一方、〔33〕歌では、「古る事」は「契りし事」と置き換えられるが、他者への発信としては展開しない。問いかけるべき相手は「人」と第三者化され、自己の想念内で過去推量の対象としてあるのみである。「問い」は、言わば自虐的に内攻する。それ故に、下句の「猶たのむ」女の孤絶感が浮き立つことになる。贈答歌が持つ攻めとそれに応じる中での駆け引きは、独詠一首の形を採ることによって、自問自答の形で逼塞する。

既に指摘があるように、馬内侍集との関係は親身歌群以外でも、例えば「十二月、人のもとより、よみにをこせたりし」とする和泉続集の七首（三二五～続三三二）中の、「雹」と題する一首、

竹の葉にあられ降るなりさらさらには独は寝べき心地こそせ

ね

（続三三〇）

にも見られる。これなどもやはり馬内侍集の次の一首を発想源にしているかと思われる。

人のもとより、こよひは行きやすべきとあれば

笹の葉にあられ降る夜の寒けきに独は寝なん物とやは思ふ

（馬内侍集一五九）

ここでも馬内侍集に見られる男女間の駆け引きは捨象され、和泉歌では、「雹」の音を耳にするばかりの女の孤独な独り寝の姿が詠われることになる。「さらさら」の音韻効果は、馬内侍の

歌の「ささの葉―さむけき」の頭韻に導かれたものであろうか。

〔43〕寝し床に魂なき骸を止めたらばなげのあはれと人もみよかし

(集三二〇・重三九二)

歌群末尾の一首。三角氏は、『仏説仁王般若波羅蜜經』巻下・護国品第五の四の非常偈「形無常主、神無常家、形神尚離」をあげ、「魂なき骸」は『大和物語』一四七段の次の歌に依るとする。

影とのみ水の下にてあひ見れど魂なき骸はかひなかりけり
用語はこれに借りながらも、一首の趣向は先述の通り〔23〕と同じく、拾遺集哀傷、相方の歌に依ると見るべきであらう。

また、「なげのあはれ」は小大君集六五歌によるとする。

ひたぶるに死なばなかなかさもあらばあれ生きてかひなき
もの思ふ身は
(小大君集六四)

かへし

亡くなればなげのあはれも言はるるをさは試みにあくがれ
ね魂
(小大君集六五)

生きていても甲斐がないと訴える男に、「ならば死んでみたら」と返したもので、冗談含みの痛烈な皮肉の歌である。この六五歌の「あくがれね」の命令形に応酬するかのようには、和泉の〔43〕は、骸となった我が身を幻視し、ならば「なげのあはれ」であれ、「あはれ」と「人もみよかし」と強く他者に求めるのである。その応答性・対詠性、あるいは複雑な視線を交錯させて生じる自己客体視は、小大君集のこの贈答歌の応答を前提にして

こそ獲得しえたものではなからうか。正述心緒歌とは遠い。

因みに、和泉「もの思へば沢の蛍も我が身よりあくがれにける魂かとぞみる」(後拾遺・雑六)を始め、遊離する魂を詠う例は他にも散見する。馬内侍集には次の贈答歌がある。

同じ所にすゑて、魂しづめしてまゐらすとて

身こからこそとにもかくにもあくがれめかよはむ玉たまの緒いとだえ
だにすな
(馬内侍集一六四)

とてまゐらせたれば

よにもみなあくがれにたる玉なればうらなきつまに留まる
ものかは
(馬内侍集一六五)

このように無価宝珠を含め、贈答歌での「たま・遊離魂は、切迫した恋を演出する歌材なのだ、これらに比べても当歌「魂なき骸」の圧倒的な孤絶感と、他者への強い希求は際立つ。贈答歌がもたらす男女の情念の交錯を吸収して成り立つ、これは対詠性の強い独詠歌なのである。

他者の死から自己の死へ、「観身」歌群の死の歌に纏わり付く恋歌的な情調は、このような男女の掛け合いの中で交わされた対詠性の強い語句の撰取によって生じていることを指摘してきた。

以上、観身歌群の表現について先行歌との関連を見てきたが、その多くが、師貞親王(花山天皇―安和二年(969)立太子、永観二年(984)即位、寛和二年(986)六月退位)、或いは居貞親王(三条天皇―寛和二年七月立太子。寛弘八年(1011)六月即位)の周辺歌人の

詠であることに気づく。

粗述すれば、先ず御形宣旨は、馬内侍と同じ文徳源氏。前掲高遠集詞書から東宮（師貞か）の宣旨であったこと、朝光集からは晩年の出家、公任集から花山院退位の年末の存命が確認されている。その兄弟惟正は、安和二年十一月から天延二年（974）四月まで、東宮（師貞）亮であった。また馬内侍は、拾遺集に「中宮内侍」として四首入集。円融朝の内裏または中宮皇子女房で、花山朝には大齋院選子内親王に出仕したかとされ、家集からは朝光・道隆・道兼・道長・公任・実方などとの交遊が知られる。

小大君は、居貞親王に仕え、東宮女蔵人左近とも称される。小大君集に、東宮居貞親王・朝光・実方・源俊賢・平兼盛などの名が見える。長く恋愛関係にあったとされる皇子の弟朝光は、永観二年、師貞即位に際し女姚子を入内させたが不首尾に終わっている。永祚元年（989）六月まで東宮（居貞）大夫であった。その朝光集には、「東宮の左近の蔵人、忘れたまふ□のちに聞こえたる」（朝光集一二）、「馬の内侍の南なる家に、十二月廿日ばかりに渡る、松どもにつけて」とする贈答歌（同三・二二三）、「御形宣旨尼になりたるに、櫛の枝の虫ついたるにつけていひやる」とする贈答歌（同二七・二八）と、これら女房歌人たちの名が挙がる。

[219]に絡む藤原高遠もまた、東宮（師貞親王）権亮（天禄四年（973）～永観二年践祚まで）の官にあり、弟の懐平は寛弘四年

(1007)以降、東宮（居貞）大夫を務めている。^[10]で引用した為頼集詞書中の「宣耀殿」は、正暦二年（991）、東宮（居貞）に入内した藤原城子（済時女）を指す。妹は敦道親王妃。藤原為頼は、為時の兄。安和二年（969）以降、寛和の変に至るまで師貞親王に仕え、長徳二年（996）以降は、同四年に没するまで太皇太后宮大進として昌子内親王に仕えた。その後、長保元年（999）十二月の昌子薨去時まで、和泉の父雅致と夫道貞がそれぞれ大進・同権大進を務めたことは周知の通りである。

以上のように、「観身」歌群には、師貞親王・居貞親王周辺の歌人の詠が多く引用されている。敦道親王と年齢の近い異母・同母の兄たちである。「観身」歌群の、拾遺集哀傷部に通底するような死の凝視、対詠性の獲得は、このような冷泉系脈の影響の中で可能となったものと見ておきたい。

先に「河原院に参集した歌人達の諸々の歌と、花山院周辺のそれとを区別する一つの徴表として、仏教的思惟の和歌への浸透度の問題があるように思う。好忠や源順の沓冠歌の手法を踏襲しながら、『なにはつ』『あさかやま』を捨て、『我不愛身命』或は『観身岸離根草、論命江頭不繫舟』の詞句を据えた群作を試みるなどは、単に生活経験の深まりから生じたというよりは、初期百首の方法に加えて、花山院周辺の和歌的傾向を敏感に摂取した和泉式部の創造的営為であったと思われる。これらについてはなお検討を加えなければならない」と述べたが、拾遺集哀傷の部に通底する和泉和歌の有り様と引用摂取和歌の傾向

性を通じて、幾分かその検討課題に答えたことになろうか。

五、おわりに

見てきたように、三つの勅字歌群は通底する要素を残しながらも、それぞれに独自の傾向性を見せていた。和泉の実生活の変転がその背景にある。体験的・実情的に詠まれた自詠との自問自答的な「いはほ」歌群、「不愛」歌群の経文との対峙、あるいは他の男女が交わした贈答歌に参入するかに応答し、自らの孤独を突き詰めていく「観身」歌群。これらからは、各歌群それぞれの際答性ゆえに複雑な視点と感情の交錯が生じる様相が見てとれ、実体験を超える切迫した表現世界が展開していることが確認されたかと思う。

各種法会の盛行に伴い經典受持・讃嘆を旨とする法文歌・経旨歌が関心を呼ぶ中で、和泉は仏教の教義と生身の存在の乖離に、罪障感を抱えつつも目を向けずにはいない。勅字題によりあるべき理念を主題として提示しつつ、それとの関係・乖離を詠じるためには、冠音のみが規制される勅字の方法は極めて有効だったと思われる。

注

(1) 中世和歌の主流たる「定数歌」と区別して言う。拙稿「初期百首と私家集―好忠百首を中心に―」(『王朝私家

集の成立と展開』風間書房 一九九二)

(2) 拙稿「和泉式部の詠歌環境―その始発期―」(『国文学研究』七一集 一九八〇・六)

(3) 拙著『和泉式部百首全釈』(風間書房 二〇〇四)、同「和泉式部続集『五十首歌』の考察」(『物語・日記文学とその周辺』所収 桜楓社 一九八〇)等

(4) 拙稿「和泉式部集『観身岸額離根草、論命江頭不繫舟』の歌群に関する考察」(『国文学研究』七三集 一九八一・三)

(5) 渡部泰明「和泉式部の歌の方法」『平安文学をいかに読み直すか』(笠間書院 二〇一二)

(6) 小松登美(他)『和泉式部集全釈 正集篇』(東宝書房 一九五九 新装版 笠間書院 二〇一二)、『和泉式部続集全釈 続集篇』(東宝書房 一九六六 新装版 笠間書院 二〇一二)

(7) 山崎誠「新出の題法華経詩について」(『和漢比較文学』8 一九九一・一〇)

(8) 杉田まゆ子「公任の釈教歌―維摩經十喻歌 その発生の機縁」(『和歌文学研究』六九号 一九九五・十一)

(9) 森田兼吉『和泉式部日記論攷』・和泉式部日記論攷 第二 笠間書院 一九七七・一九八八)

(10) 稲田利徳『西行の和歌の世界』第一章(笠間書院 二〇〇四)

- (11) 岩瀬法雲「和泉式部の無常観―連作「我不愛身命」をめぐって」(『園田女子大論文集』一〇 一九七五)
- (12) 拙稿「匡衡集小考―和泉式部歌集所収二歌群との関連をめぐって―」(『白梅学園大学・短期大学紀要』第43号 二〇〇七・三)
- (13) 『実方中將集・小馬命婦集注釈』(大学堂書店 一九九三)
- (14) 三角洋一「和泉式部集を読み解く―観身論命歌群―」(『国文学』三五―二二 一九九〇・一〇)
- (15) 他に「道芝の露」(小大君集六二・重之子僧集四八)、「道の空」(小大君集六三) など、特徴的の歌語が集二四(百首歌)・八六五(花山院歌合) などに見られる。
- (16) 今野厚子『天皇と和歌―三代集の時代の研究―』(新典社 二〇〇四) 第三部は、拾遺集哀傷部の特性を、天台僧の詠歌の多人、摩訶止観に依る構成などから、天台宗への傾倒に見、花山院の志向との共通性を指摘し、院撰者説を主張する。
- (17) 注(2)に同じ(注(2)論文では、花山天皇或いは居貞親王の歌合題と、初期百首歌材の関連に触れ、また和泉式部集の「花山院歌合」題が長能集・道命集と重なることから、今回触れなかったこれら花山院周辺歌人との接触の可能性について述べた)。

くぼき としこ (日本文学)

子ども学部発達臨床学科

Kuboki Toshiko: A Study on "Rokujū-kagun" of "Izumishikibu-Kashū": the Expression Method and Its Backgrounds